

### 平成15年度企画展

#### 「暮らしを支えた技術—今なお息づく伝統の技」

10月30日から12月14日までの会期で、樹皮や蔓などの繊維素材を用いて作られた用具とその製作技術の一例を紹介する企画展を開催しました。

展示した資料は [みの] [背中当て] [つかり] など39点です。昔、これらの用具を作った経験がある方々にお話を伺うと、一つの用具が完成するまでに材料の準備に始まり、さまざまな作業工程があることがわかります。しかし現在ではこれらの用具を作ることがほとんどないため、素材の準備を含めてその製作方法を知っている人や技術を持つ人は年々減少しています。そのためこの企画展では、製作技術を紹介することと記録も兼ねて、次の方々による実演も行われました。

11月8日

高屋喜多男さん(ガマはばき、ミョウガからはばき)  
榊原市男さん(たてご)

11月22日

高屋喜多男さん(藁みの)、榊原市男さん(つかり)

12月13日

高屋喜多男さん(背負いもっこ)、榊原市男さん(ねがき)  
河内金作さん(たてご)



樹皮を加工して作られた民俗資料



フジさね(フジ蔓の芯)を打って柔らかくする作業の体験。  
これを材料に「さねはばき」を作りました。



「背負いもっこ」製作実演の様子



牛や馬の「たてご」を作る様子



完成した「つかり」を背負ってみました。

## 国指定記念講演会・祝賀会（11月10日）

平成15年2月20日付けで国の重要有形民俗文化財に指定された「北上山地川井村の山村生産用具コレクション」の指定記念事業が開催されました。

記念講演会では文化庁文化財部伝統文化課の主任文化財調査官大島暁雄氏より「わが国の山村文化の特色」と題して講演をいただきました。全国的に見た川井村の指定資料の位置付けを分かりやすくお話しして下さいました。

その後の祝賀会では、長年にわたりご指導、ご協力をいただいた方々を囲んで指定をお祝いしました。

また、これに先立ち6月には、指定となった資料の内容を報告する報告書（A4判2分冊）が発刊され、関係各機関に配布されました。



講演会の様子

## 館務実習から

（8月20～22日、25～27日）

今年度も2期にわたり岩手大学の博物館実習生23名を受け入れました。学生たちにとっては実務の体験が目的ですが、資料館にとっては、多くの学生に作業をお手伝いしてもらうことにより、館内作業を進める機会でもあります。今回は聞き取り調査の他、資料の移動作業、展示資料の防虫作業を行いました。

また、実習3日目には食文化伝承活動講座の協力により、ソバが花ざかりの道又の雑穀畑の見学や、蕎麦打ち体験やアワぶかしなど郷土食の試食を行いました。学生たちは、実務に合わせて川井村の伝統的な食文化にも触れることができました。



展示室での聞き取り調査の様子



資料を見ながらの聞き取り調査の様子



ソバ打ち体験

### 実習生の感想

今回の蕎麦打ち体験は、ソバをまいてから食べるまでのほんの一部の工程にすぎません。ソバやヒエの種をまいて育てるところから体験していたら、ただ楽しいだけの作業ではなく、つらいことも多々あると思います。そのことを考えると伝統食文化を後々まで残そうと実践している皆さんの取り組みはとても素晴らしいことだと身にしみて感じました。そのような方々と今回交流することができ、とてもよい経験になりました。

（岩手大学 人文社会科学部 大友沙樹）

### 聞き取り調査に協力して下さった皆さん

8月21日

河内新太郎さん（江繋地区） 大島トリさん（小国地区）  
眞田スミ子さん（小国地区）

8月26日

山名トクさん（箱石地区） 山名紫富さん（箱石）  
永田キセさん（川内地区） 向口フサさん（川内地区）



11月1日に実施した民俗資料コレクションの国指定と村民文化祭第30回を記念した講演会の内容を紹介します。

第30回村民文化祭・国指定記念講演会

# 文化財はみんなのもの

—過去と未来をつなぐ架け橋— (要約)

名久井 芳枝

川井村北上山地民俗資料館は、現在小学校へ通われている3、4年生の方が生まれた頃に開館しました。当時は日本の至る所で民具は「ごみだ!がらくただ!」と言われていましたが、それらは整理をして分析すれば、人間の生き方や歴史を学ぶ上でかけがえのない文化財となります。川井村北上山地民俗資料館の資料は、10年を経て「北上山地川井村の山村生産用具コレクション」として国の重要有形民俗文化財に指定されました。おめでとうございます。これは簡単に言い換えれば、北上山地に根を張って生きてきた人々の生活を根底から支えた用具が、国の宝物になったということです。

### 生活と生活用具

私達の今日一日は、朝に寢床を離れ、再び同じ寢床に入って過ぎて行きます。人それぞれに他とは違う意識を持ち、仕事の内容や着るもの、持ち物に対する好みの違い、食べ物の内容の違いを見せながら個性的に生きています。しかし人間の基本的な営みにはそれほど違いはありません。人は逆立ちしたまま生き続けられません。病気でもしない限りは、食べ物は口から食べて栄養を体内に取り込み、いらなくなったものを排泄します。そのような、人間が生きるための基本的な営みを支えてくれるものが生活用具です。普段私達はあまり気に止めることなく生活していますが、それらがなければ生きていくことができません。それは北国の冬を裸では過ごすことができないことを考えれば理解できます。体を保温し保護する衣服があるからこそ生きられます。また雨や風や雪、夏には太陽の熱射から私たちを守ってくれる建物、更に飢え死にしない食べ物等、衣食住のバランスが保たれてはじめて命を支えることができます。有形民俗文化財とは、今から50年くらい前まで使われていたそのような生活用具のことです。

毎年、山菜が採れる春先に遭難のニュースを聞きますが、その頃の天候は、里ではばかばか陽気でも山の夜間は冬そのもの。道に迷った場合、備えがなければ体の衰弱を招き、命とりになりかねません。野宿をされたが、幸い命に別状はなかったという場合もあれば、命を落とされる場合もあります。そう



いう時、何が生死を分けるのでしょうか。すると一枚下着の数が多かったこと、あるいはたった一枚のチョコレートを持っていたことが生死を分けている事実に出会います。こんな時、着るものの役割や食べ物の持つ本来の意味がはっきり見えてきます。着るものや食べ物が、私たちが生きていくために欠かせないものだということがよく理解できます。

しかしながら現在なお「もの」の根本的な役割が認識されているとは思えません。現在は歴史の一頁に過ぎません。過去の歴史の上に現在が成り立ち、さらに未来を支える役割を現在が担っていることを思う時、いつの時代にも、今を生きている人達が、私達はどうか生きてのか、私達の先祖はどうか生きていたのか、そのことを未来に伝える役割を担う責任があります。有形民俗資料いわゆる民具は、普通にそして懸命に生きた人々のメッセージを残していますから、そのメッセージを読み取る術があれば、過去の人類の歴史が、為政者の権力争いや戦争の推移だけではない、普通の人々の営みをも伝える豊かな内容のものになるに違いありません。

### 「もの」が残したメッセージ

では、私たちの祖先は「もの」の中にどのようなメッセージを残しているのでしょうか。民具の多くは自然の素材を手作りしたものですから、人が素材を、どういう道具でどのように採取し、どのような技術で加工し、組み立て、形に仕上げたかということが、「もの」を観察することによってほぼ分かります。実際に作った方や使った方からお話を伺うことができれば、「もの」を作る時、あるいは使う時の状況や考え方、感じ方まで知ることが可能な場合もあります。またそのお話からは、地域の年中行事を軸とした暮らしぶりや信仰、風俗、慣習、物流や交易、当時の好みなども知ることが出来ます。

私達は自然の恵みなしでは生きられません。水田から収穫された米や畑から収穫された雑穀や野菜、

海や川や湖から捕れた魚や貝や海草、また山野に生きる動物を食べて生きてきました。山の木を伐り、それで家を建て、道具や用具を作って使いました。現在の私達は地球規模に拡大した形で自然の恩恵に浴していますが、それにしても私達は自然に対して無知になってしまいました。昔の生活にそっくり戻ることはできませんが、一時代前の身の丈にあった暮らしには、自然と共に生きる知恵が詰まっています。コンクリートジャングルに囲まれて自然が見えにくくなっている私達に、それらは自然と共生する術を教えてくれているような気がします。こんなに豊かな情報を提供してくれる「もの」が「ごみ、がらくた」であるはずがありません。先祖の暮らしに密着していたものは、歴史的な時の流れを潜り抜けると文化財となり、資料館に展示保管されている国の宝物と、同じ価値を持つようになります。

各地に存在する資料館の資料が整理され分析されていけば、その情報によって他地域との比較が可能となり、地域の特性がくっきりと浮かび上がります。このことはその情報が地域の指針となる可能性を含んでいますから、資料館は地域の自然や生活文化をそっくり残すことに力を注ぐべきだと思います。そのように整理された資料館は、たとえ来館者が少なくても、そこに資料館が存在している大きな意義があります。

#### 人々の意識が守る文化財（戦時下の文化財）

「文化財が奇跡的に遺った」という言い方をされることがありますが、文化財が奇跡的に遺るとするのは稀なことです。文化財は意識しなければ守ることができません。日本ではこの58年間辛い戦争を経験することなく過ごしていますが、地球上では必ずどこかで、今このときにも戦争が行われています。胸を膨らませるようにして21世紀を迎えましたが、現実には21世紀の幕開けは暗く戦争が身近に感じられるものになってしまいました。

イラクとアメリカの戦争は未だに戦時下の様相ですが、当初膨大な量の文化財が略奪にあったというニュースが流れました。私もやり場のない重い気分を感じていましたが、次第に事実がはっきりし、それらの多くは博物館の職員によって疎開していたことが分かってきました。安堵すると共に、職員のご苦労が思われたものです。

ロシアのサンクトペテルブルグにあるエルミタージュ美術館には、エカテリーナ女帝が収集した膨大な美術品がありますが、やはり戦争に揉まれ続けました。しかしその美術品の大半は今も健在です。それは奇跡的に美術品が遺ったのではなく、戦乱に巻き込まれることを知った美術館の職員の強固な意識

によって守られました。第2次世界大戦の折の疎開では、スタッフによる24時間の荷造りで200万点の美術品が10日間ですべて梱包されたということです。疎開を済ませた美術館の壁面に、空になった額縁が静かに並んでいる様子が、テレビの映像から流れてきましたが、館員が「必ず元の場所に絵画を戻す」ことを心に誓ってその額縁を残したということでした。その額縁が並ぶ映像は、戦争の愚かさや空しさ、そして館員の悲しみで充ちていましたが、一方で強い意志という一筋の光を感じたものでした。危機一髪。美術品は難を逃れました。

中国の北京に故宮博物院があります。遺跡博物館ですが、皇帝一族が使用した宝物や生活用品が当時のままに置かれ、皇帝の栄華を極めた暮らしぶりが理解できる場所です。故宮もまた戦争の波に揉まれました。この文物は日本人が略奪者として警戒された歴史をもっています。日中戦争の時、故宮の文物は日本人の略奪から逃れるために、5回にわたって大疎開を続けました。その輸送距離は1万キロに及ぶと言われていますが、大変な困難を伴うものだったようです。歴史の現実には辛く悲しいものがありますが、戦争は常識的な考え方の人々の判断さえ狂わせてしまう恐ろしいものだと思います。膨大な文物は分割された状態ですが、失われることなく現在に伝えられました。この大仕事もまた、文物を守り抜こうとした人々の意識がなければ成就しなかったものだと思います。歴史には名を残さなかった多くの人によって、大きな仕事が成就されました。

#### 過去と未来をつなぐ架け橋

点と点はつながらなければ線になりません。地域の歴史は地域に生きる現在の人々が橋渡しをしなければ、過去から未来へとつながりません。「もの」を残すことはできてもそれに付随する記録を残さなければ、「もの」が歴史を証言する文化財としての役割を果たすことはできません。川井村では多くの村民のご協力によって資料整理が着実に進められています。このことは川井村の皆様が記録を残すという作業を通して、過去から未来への架け橋としての役割を担われているということに他なりません。「文化財はみんなのもの」そして「みんなで育て上げ保存していくもの」だということを、川井村の村民おひとりおひとりが証明して下さいました。資料館の建物は小さいけれど、中身は日本の何処へ行って自慢しても恥ずかしくないものです。そういう資料館を作り上げた川井村の皆様にご心からの敬意を表し、私の話を終わらせたいと思います。

(川井村北上山地民俗資料館 名誉館長)



作図作業の様子

## 企画展実演・体験コーナーから

企画展期間中に「ふるさと工芸クラブ」の皆さんの協力で「ミニ箕」作りを体験する工作コーナーを設けました。コーナーでは、図書館バスを利用した村内の児童生徒の皆さんや一般の来館者が「ミニ箕」作りに挑戦しました。

この「ミニ箕」は、脱穀のときに用いる【箕】のうち、細く裂いた竹を組んで作ったものをイメージした、紙製のミニチュアです。ヤス（サワグルミ）やツキノキの樹皮を広く剥いで作った【箕】が多い本村ではなじみの薄いものかもしれません。ちなみに当館では竹製の【箕】を1点所蔵しています。

「ミニ箕」は飾りや小物入れとして使うことができます。参加した皆さんは、それぞれ真剣に仕上げていました。



「ミニ箕作りの様子」



完成

## 実測図講習会から

実測図講習会（I）は、当館名誉館長でもある名久井芳枝先生を講師に、6月に開講しました。

受講生は、実測図の果たす役割や作図の方法などについて講義を受けた後、実際に【豆腐箱】や【桶】などの民俗資料に向き合い、計測、元図作製、トレスと作業を進めてきました。一見して同じ資料でも、実際に計測してみると一点一点の違いがあることがわかり、受講生は作りの違いや、使用して変形した痕跡などを確認しながら丁寧に作図作業を行っていました。作図成果は本紙でも紹介していきます。

## 鞭牛和尚の道供養碑 川井村の文化財

「宝暦九年 道供養林宗六世 卯ノ五月八日」

（『川井村郷土誌上巻』昭和37年発行より）

現在では碑文がほとんど消えかけたこの石碑は、1759年に鞭牛和尚が川井村巖の難所を開削したと



巖の道供養碑

き建てたとされる「道供養碑」です。巖の旧道の川井寄り、JRの高架橋そばに建っています。

鞭牛和尚は30年以上にわたり三陸地方の道路の難所開削に尽力した人物です。

この他、村内に現存する道供養碑に「老木の道供養碑」「岡村岩屋の道供養碑」があります。

## 15年度の入館者数(4月～2月)

(人)

一般	大学生・高校生	中学生・小学生	合計
1,613	108	378	2,099

## 来館者ノートより

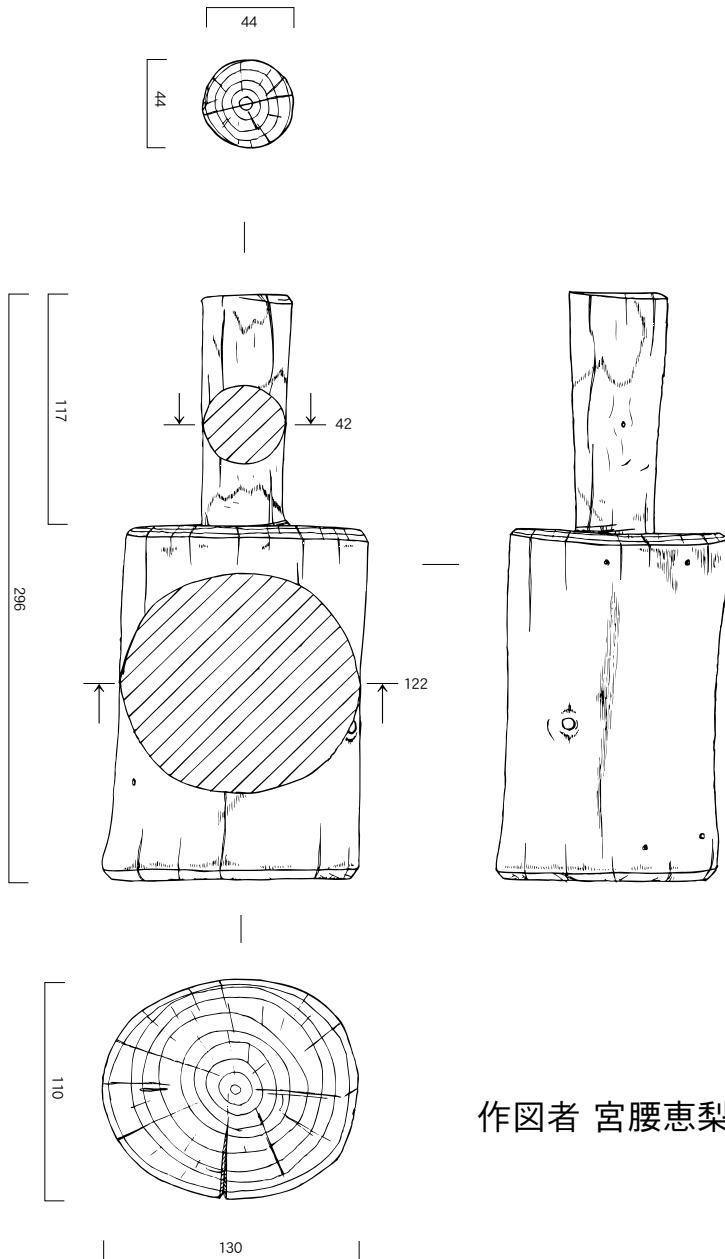
「小川医院」の展示がとてもよかったです。

手をのばせばすぐそこにありそうな、つい最近まで使われているものが多くて、なつかしい感じがしました。

（遠野市から）

小国小4年生の皆さんが作った『昔の小国にこんなものがあつたずうがえ図鑑』。資料館を見学したり、おうちの方にお話を聞いたりしてまとめたそうです。図と解説文付きの力作です。でも子どもたちだけでは、資料館に展示してある昔の生活用具がどのように使われていたかわからなかったと思います。地域の方々にお話を聞いてこそその成果だと思いました。

民俗資料館にとっても地域の皆様が先生です。（学芸員）



作図者 宮腰恵梨



今号は[蕨打ち槌]を紹介します。

[蕨打ち槌]は蕨を打って柔らかくする用具です。どっしりと重い[蕨打ち槌]でよく打った蕨は、蕨細工のとき細工しやすく、仕上がりもよくなります。丸太を利用した[ぎんぼうし]と呼ばれる台に蕨をのせて作業します。

蕨を打つ作業は子どもたちもお手伝いしたそうです。そうしておじいさんから学校に履いていく[わらじ]などの履物を作ってもらったそうです。

伝票番号	1131
標準名	蕨打ち槌
地元名	蕨打ちつづ
寄贈者名	中館繁造氏
地区名	川内地区
話者	永田キセ氏・向口フサ氏
材料	木材(堅い木)
重量	2700g
製作者	自分の家で男の人が作った。
使用年代	昭和30年代まで
使用方法	・[わらじ]や[つまご]を作る際、水を口に含んで蕨に吹きかけて湿らせ、[蕨打ち槌]でたたき、やわらかくした。
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豆腐を作る際の重しにすることもあった。</li> <li>・田がなかったため、蕨は[米俵]をほどいて使った。[わらじ]や[つまご]は蕨製のものがあたたかかった。</li> <li>・どこの家にもあった。</li> <li>・家によって大きさが異なるのは、材料となる木の大きさによる。</li> </ul>
調査年月日	平成15(2003)年8月21日
調査者	及川雅世

蕨で[馬ぐつ]を作る様子。

湯澤孝さん(小国地区公民館活動より)

